
校舎裏のツギハギ感

一筆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

校舎裏のツギハギ感

【Nコード】

N6983X

【作者名】

一筆

【あらすじ】

校舎裏で野球部マネージャーの池端さんが頭から血を流して倒れていた。投球練習中の事故であるかのように見えたが、私の部活仲間で友人の克磨は、彼女を故意に重症たらしめた犯人がいると言いはじめた。

部室のドアを開けると、そこにはいつも通りの風景が広がっていた。

そこらに出しっ放しの椅子。掃除の途中のままで片されていない机。山を崩して散らかったままの書類。箱から溢れて転がったままの軟式野球ボール。

椅子三つを使って仰向けに寝ている武登克磨^{むと かつま}。

私はそれを見て深呼吸を一度して、肩からかけていたカバンを手を持った。

「放課後からいきなり何しとるんじゃ！」

思い切りカバンを克磨の腹に放り投げた。グヘッ！ と叫んで、克磨は椅子のベッドから転がり落ちた。

「……暴力女」

よろよろ立ち上がって克磨は呟く。私は克磨とともに転がった自分のカバンを拾い上げて机の上に置いた。

「今まで期末対策を友達としてきた私に対して、呑気ままに寝ていた君が悪い」

「うるせえ。オマエの都合をボクに押しつけるな」

私と克磨は向かい合うように椅子に座り直した。克磨は右膝を立てて摩っていた。ぶつけたらしい。摩る仕草がおかしい。

「何笑ってんだよ？」

頬が緩んだのを目ざとく指摘された。

「なんでもないよ」

克磨はフンツとそっぽうを向いた。だから、そういう仕草が笑いのつばなんだって。

「オマエ、本当に気味悪いぞ」

あからさまに椅子を引いて、わたしから距離をおいた。心なしか傷付いたが、克磨にそんなことをいちいち文句たれても仕方がない。

「というよりさ、君はこの時期に部室で昼寝してるって、いったい何者だよ？ 必死に勉強してろよ」

埒のあかない話をしているのもなんだから、話題をかえた。

「どんな時期の話をしてるんだ、オマエは？ まだテスト一週間前じゃないか。必死になる方がどうかしてる」

ハラタツ。

「くたばればいい」

「はいはい」

呆れたように克磨は溜息をついた。

「ところで、オマエは何しにきたんだよ？」

いったん座った椅子から立ち上がって克磨は聞いてくる。そのまま床に散らばった書類を集めはじめた。私はそれを手伝うことにした。

「何しにつて、テスト勉強をしにだよ。家だと集中できないから」

「さっきまでお友達さんとしてたんじゃないのか？ そこまでオマエはまずいのか？ ご愁傷様だな。赤点で卒業できませんでしたなんてことにならないようにしろよ」

私は厚さ一ミリほどになった書類の束で克磨の頭をはたいた。

「言い返せなくなると腕力に訴えるのは、女の子としてどうかと思うぞ」

「男女平等」

「じゃあ、ほれ」

と、克磨も書類の束で私の頭をはたいた。

「女の子に手を上げるなんて！」

とりあえず女の子らしい反応を見せてみるが、「男女平等」と予想の範囲内の答えが返ってきた。

「そんなことより、外、騒がしくないか？」

窓の方を向いて克磨は言った。耳を澄ますと、人の怒鳴り声が聞こえてきた。

「見にいってくる」

いつもは自分から動こうとしない克磨が、それでも大儀そうではあるが立ち上がり、私のことなんて待たずに部屋を出ていった。仕方ないから私は彼のあとを追った。

騒ぎのとは、人気など建築当初から期待されていないという感じの校舎裏にあった。校庭から校舎とフェンスのあいだの一本道を抜けていった先にある。

校舎裏は不思議な場所だった。校舎とフェンスに囲まれた長方形の空間で、フェンス沿いに茂った木々の葉の隙間からこぼれた陽が細々と地面を照らしている。なぜか野球部が練習でよく使っているバッティングネットが一つあり、その周りに硬式ボールが散らばっていた。中には、遠くへ転がっているボールもある。

バッティングネットの前に人が集まっていた。集まっていたのは野球部の人たちだった。白いユニフォームが、校舎の影と初夏の陽射しの中にむごむごと浮かんでいた。

克磨は人だかりの外にいて、私のことに気付くと近寄ってきた。

「なんでもない。帰るぞ」

ぶっきらぼうにそう言うと、私の手を引いて今来た道を戻ろうとした。素直に従いはせず、私は踏ん張ってその場に立ち続けた。私の手を引く克磨の力が増した。それになお歯向かって、人込みへと目をやった。人と人の隙間から、彼らが何を問題にして集まっているのかが覗けた。

彼らの中心で、野球部の帽子を被ったジャージ姿の女の子が倒れていた。垣間見えた彼女の右側頭部から血が流れ、彼女の頭部周辺の地面に赤い円が描かれていた。陽で照る砂の白と、木陰で陰る黒が彩る校舎裏の地面に、一箇所だけ赤色のグラデーションが施されていた。

「いったい、何があったの？」

誰に問うわけでもなく、私は呟いていた。いやそれは克磨に問いかけたものかもしれない。克磨なら、私の問いぐらい簡単に答えられると思ったから。

「わからない。けど、まだだ」

声の方を向くと、克磨は無表情に張りついた目で私を見ていた。克磨の言うことを聞いておけばよかった、と後悔した。

「おい、武登、見世物じゃないんだ！ 下がれ！」

バットを担いだ野球部員の一人が克磨に怒鳴った。バットの銀色が太陽光に照って眩しい。

「そうだな、悪かった。晩家^{くれにけ}さん、ほら」

庇護するように私の名を呼んだように感じた。繋いだままの手を引いて、私を問題の外へと導いた。

輪の外へ出ると、救急車の音が低く聞こえてきた。その音はだんだんと高くなった。

三

救急車が女の子運んでいき、その場に残ったのは野球部員が一人と私と克磨。救急車の音が聞こえなくなると、克磨がにわかに私のそばから離れて、野球部員に近付いていった。よくわからないまま私は克磨に従った。

「大条だいじょう。話を聞いてもいいかな？」

克磨はその野球部員の肩を後ろから叩いて聞いた。大条と呼ばれた野球部員はしかめた顔を向けた。さつき克磨に対して下がれと怒鳴った人だった。相変わらず担いだ金属バットが太陽光でちかっと光ったりする。

「おまえ、首突っ込むなよな。こっちはもうすぐ夏大だつてのに、面倒は嫌だ」

「そう言うなつて。ちよつと気になるんだ」

克磨は不敵に笑んだ。

「池幡いけはたさんはどうして救急車で運ばれることになったんだ？」

克磨が言った池幡さんとは、確か野球部のマネージャーだった気がする。いっしょのクラスになったことはないけれど、元気な女の子でにぎやかだから、よく彼女の噂は耳にする。会ったことはほとんどなかったため、運ばれていった女の子が彼女であることには気付かなかった。

「事故だよ！ 頭に大怪我をしたんだ！ それがどうかしたのかよ！」

「いや、べつに。で、何があったんだ？」

「やんわりと怒鳴り声をスルーする克磨に、大条くんはため息をついた。」

「……伏垣ふしがきがさ、投球練習中に誤って池幡の頭にボールぶつけちまつたんだ」

伏垣くん？ 伏垣くんとは去年同じクラスだった。小柄で寡黙な

人だ。時々坊主頭にしてくることを不思議に思っていたが、野球部ならば合点がいく。

「ふーん。こんなところで？」

楽しそうに克磨は言及する。楽しそうにというのはいささか不謹慎であるが、克磨の抱いた疑問は私も抱いた。野球部なら普通はグラウンドで練習しているはずだ。こんなところで練習中の事故が起こるなんてことがあるのだろうか？

「伏垣が投球練習するときはいつもここでしてたんだよ。ブルペンが人数分ないからさ。伏垣のやつ補欠だからって遠慮してたんだ。遠慮ついでにあいつはここで練習するってみんなには言ってない。まあ、みんなそう気にしてないからいいんだけどな」

伏垣くんらしいといえらしい。私の記憶にある伏垣くんは、いつでも一歩相手に譲るような人だった。話しかければ笑顔を見せてくれる人でもある。

「それで、なんで池幡さんがここにいたんだ？ 彼女は伏垣くんがここで練習していることを知ってたのか？ それよりも、夏の大会が近いんだろ？ 補欠はいいとして、マネージャーがグラウンドを離れていいのか？」

「……いちいちおまえは気に障る言い方するよな」

「気のせいだろう」

大条くんの表情が陰しくなったのがわかった。悪びれもせず言う克磨に、ちよつと私もいらつときた。

「池幡は知ってたよ。気付いたらいなくなる伏垣を不審がつて問い詰めたらしい。二人は同じクラスだから言い逃れられなかったんだろう。それで時々様子を見にいつてもらって、ついでに投球練習の相手をしてもらってたんだ。あと、今日はマネージャーたちには道具の手入れをしてもらってたから、一人ぐらい減っても平気だったんだ」

「手入れって？」

「ヘルメットとかメガホンとかの点検だよ。バットとかボールとか

もだ。使えそうなやつのを調べてもらって、汚れてたら綺麗にしてもらうんだ」

「ふーん。それで、事故が起こったその後は？」

質問の意味はなかったのか！ と怒鳴りたくなるほど淡白な様を見せる克磨だった。大条くんは呆れ感を溜息一つで表した。

「伏垣は俺にまず伝えにきたんだ。池幡の頭にボールをぶつけて気を失わせてしまったってな。だから、まず先生に伝えにいかせて、俺は池端のもとへむかったんだ」

四

かなしげ みつは
金重光羽さんは、一年生のときに同じクラスだった。諦観したような眼差しをしながらも、体育の時間では他の人より活動的だった記憶がある。なるほど、体育会系だったのか。

彼女も伏垣くんがここで練習していることを知っていた。池幡さんが伏垣くんを問い詰めたとき、いっしょにいたらしい。金重さんもクラスメイトだとか。

「校舎裏に着くと、血を流して横たわってる池幡を見付けたんだ。それから間もなくして道具の点検をしていたマネージャーの一人である金重もやってきた」

そう大条くんは説明を続けた。

金重さんはバットが一つ足りないことに気付き、池幡さんか伏垣くんが知っているんじゃないかと思ってきたらしい。

「バット？ そのバットは見付かったのかい？」

克磨の問いに、「さっきまでの騒ぎがあれば、見付かってないことぐらいわかるだろう。探してすらいないんだから」と大条くんは返した。

「それもそうか。盗難じゃなきゃいいな」

そんな心配をしていたらしい。

「ああ。……まったく、大会近いのに面倒なことになりやがって」
大条くんは舌打ちをする。どうやらお話は終わりらしい。でも、あれ？

「そういえば、伏垣くんは？」

口をついて出た。克磨と大条くんが私のことを見る。これまで私はその場にいながらにしていなかったようなものだけに、二人からしてみれば意外であったのだろう。でも、仕方ないじゃないか。最初から今まで、その伏垣くんを見かけていないことに気付いていし

まったのだから。

「ふーん。そういえばそうだな」

「伏垣なら生徒指導室だよ。顧問にそのまま話を聞かされてる」
言われてみればあたりまえか。

「じゃあ、あとで伏垣くんにも話を聞いてみようかな」

ぼそり、と克磨は言った。思わず聞き逃してしまいそうだった。

「ちよい待てよ、武登！ 何しようとしてんだ？」

大条くんが憤然たる様子で克磨に迫った。私もなぜそこまでするのかわからず、克磨の口元を見た。

「何って、もつと詳しく聞きたいからだよ」

「話しただろう！ 伏垣の気持ちを考えてみるよ！ おまえ、楽しんでるだけじゃねーか！ いいかげんにしろよ！」

マシガンのごとく大条くんは克磨を怒鳴った。……大条くんの言い分ももつともだし、これから私が克磨に言っただけで聞かせようとしたことだけど……さすがに克磨がかわいそうになった。

「うるさいな。野次馬根性って言葉知ってるか？ 日本人特有の性質の悪い性質だ」

思考改正。やはり克磨は悪く言われて仕方ない。コウイウ子二八、仕方アリマセンッ！

「たわけがっ！」

なっくるッ！ 捻れを加えた左ストレートを、軽く克磨の右頬に喰らわせた。もんどりうつて克磨は仰け反った。ザマア三口。

「何すんねん！」

「黙っとけっ！ もつと君は人の気持ちがわかるようになりんしゃい！」

「オマエこそ人の痛みを知れ！」

「嫌な思い出を掘り起こされるのは嫌でしょ！ わかった！」

「ブーブー！」

我ながら頭悪いやりとり。ほら、大条くん退いてるし！ なんだか目線が冷たい……！ 咳払いを試してみる。

「か、克磨は私が止めときます。お騒がせしました!」

むんずと首をぞ捕まえて克磨に一礼させると、そのまま引つ張っていった。恥ずかしくて大条くんの表情なんて伺えなかった。

「はーなーせーやー!」

「あーほーいーえー!」

こうして私と克磨は大条くんの前から退場した。

して、部室。膨れっ面の克磨と二者面談のように向かい合っている。

「まったく。君はいつもマイペースというか自己中というか。むしろ事故中?」

「うるさいな。オマエには関係ないだろう」

「うるさいな。いっしょにいる人の身になってみるよ」

克磨は頬杖を突いてそっぽを向いた。

「そういえばさ、大条くんとは友達なの? 話してるところを見たことないけど?」

「それはオマエの間が悪いからだろ。アイツとは三年間同じクラスなんだよ。アイツは強打者でさ、うちの野球部の四番らしいんだ。それでキャプテン」

なるほど、だから威圧感のようなものがあつたのか。

「ありえないと思うんだ」

ぼつり、克磨は呟いた。何か大切なことを言うとき、いつも突然、独り言のようにして彼は言いこぼす。

「何が?」

「硬球とはいえ、帽子を被った頭にボールがあたったぐらいじゃ、あそこまで出血するとは思えないんだ」

五

「帽子っていうのは、一般的に思われている以上に頭を守るのに役立つんだぞ」

かつま
克磨は言う。

「プロのピッチャーのボールならわかるとして、地区大会一回戦止まりのうちみたいな野球部に、そこまで威力あるボールを、しかも補欠投手なんか投げられるとは思えない」

ふしがき
あからさまに酷いことを言っているが、克磨の意見には一理ある。伏垣くんは小柄で、そう速いボールを投げるようには思えない。

「君は、何が言いたいんだ？」

いけはた
「池幡さんが気を失った原因は、ボールなんかじゃない。もっと他のもの。もっと殺傷力のあるもの」

剣呑な単語が飛び出し、思わず苦笑いを浮かべてしまった。

「殺傷力ってなんだよ？ まるで殺意があつたみたいじゃないか」
私が言うと、克磨は「殺意ねえ」と興味なさそうに言った。

「殺意は、まあ、あつたのかな」

さりげなくトンデモナイこと言ったぞ、コノ子？

「何言ってるの？」

「最初は事故だったんだと思う。だけど、最終的には事故だけじゃなかったんじゃないかな？」

克磨の言っていることはよくわからなかった。最初は事故で、それから何かが起こったとも言うのだろうか？

「だってさ、だって……まあ、ボクが今言ったボールによって出血が起こっていないとすればだよ、いったいどうして池幡さんは出血していたんだと思う？ それも頭部周辺の地面一帯にも及ぶほどに？」

「それは……」

もっと力のある何かで殴られたから？ でも、何で？

「思い浮かばないだろう？ 倒れたときに頭を切ったって言うのも考えられるけど、出血は帽子で守られている個所からだった」

そんなものを確認していたのか、コノ子。

「それに、そうだとしたらわからないことがある。何かで殴ったとして、血がその何かについてもおかしくない。何かから血が地面に滴り落ちてもおかしくない。辺りにも血の跡が残っていてもおかしくない。だが、なかった」

そう言われて試しに思い返してみると、確かに血は彼女の頭部周辺にしか見られなかった。かつ、あの校舎裏で不自然に血のついていたものはなかった。

「殴った何かがあるはずだけど、あの場所にはなかった。隠したのか持ち去ったのか」

校舎裏にはものを隠すような場所はなかった。それに校舎裏へ通じる校庭からの通路もかり。ただの一本道だから隠すような場所はない。

「持ち去ったのかな？」

「こればかりは伏垣くんが離れて、だいじょう大条がやってくるまでどれくらい時間があつたのか次第だからな。でもまあ、持ち去ったらどこかしらに血の跡は残るだろうから、たぶんないだろうけどね」

「えっ？　じゃあ、君の考えはそこでストップじゃないか」

堂々巡りをはじめている。克磨は考えすぎなだけで、本当のところボールが原因でしかないのではないのだろうか？

「例えば血を拭ったとか」

克磨は目線だけをこちらに向けた。私は思わず背を正した。

「でも、何で？」

「着ていた服とか」

「ナンセンス。血がついていたのは池幡さんの帽子だけだよ」

「雑巾とか」

「なんで？」

「なんとなく」

克磨はそつと立ち上がり、背伸びをした。

「ちよつとゴミ捨て場にいつてくる」

突然そんなことを言ったかと思うと、早速実行に移していた。

「ちよつと待つてよ！ 私もいく！」

「来てもいいけど、オマエには他にやつてもらいたいことが今浮かんだ」

なんだかちぐはぐな言い方をする。私は首を傾げながら、「それつて、ついてくるなつてことでしょ？」と聞いた。克磨は頷くと、

「伏垣くんを足止めしてくれ」と言った。

「もうそろそろ伏垣くんは解放されてるだろう。もういなくなったら仕方ないけど、いるんならボクが戻ってくるまで生徒指導室の前で留めておいてくれないか？」

簡単だろう？ そんな顔をした。

六

伏垣くんは、本来課されるよりも過大な罪の意識を負わされてしまつかもしれない。

今日初めて真摯な顔を浮かべて克磨は言った。

「ボールが原因じゃないとすれば、池幡さんを重傷たらしめたのは他の人ということになる。だから、伏垣くんから話を聞く必要があるんだ」

お遊びや好奇心で伏垣くんから話を聞こうとしているわけではないようだ。だが、克磨の言うことが正しいのなら、今回の事故には犯人がいる。つまり事件だ。

犯人。池幡さんを重傷たらしめた人物。

私は、克磨の言うとおり伏垣くんの様子を見に行くことにした。

短いやりとりのあと、まるで似つかわしくないぐらい颯爽と克磨は出かけていった。さりげなくカバンを持っていった。

指導室は二階にあり、部室からは二つほど下の階になる。階段を下りながら克磨の言葉を思い出した。

「事故じゃなくて事件、か」

辺りに人もいないので、思わず独り言をもらしてみる。

「伏垣くんの話し次第、か」

息を吐いて天井を見上げた。

私が生徒指導室の前に来てみると、部屋の小窓から明かりが漏れていた。近付いて覗いてみると、伏垣くんと教師が二人いた。顧問の先生と教頭先生かな？ 部屋の中をじろじろ見ているわけにもいかないから、私は指導室の正面の壁にもたれて待つことにした。

「あら？ 晩家^{くれにけ}さん？」

不意に声をかけられた。声の方を向くとジャージ姿の金重^{かなしげ}さんがいた。

「こんにちは。大変だね、野球部」

金重さんは複雑そうに苦笑いを浮かべた。

「こんにちは。うん、ちょっとね。晩家さんは、こんなところで何してるの？」

うーん。確かに私がここにいるのは明らかに不自然だ。でも、話していいのだろうか？ 大条くんにはあまり関わるなみたいなこと言われたから、あんまりあからさまにするのはまずいだろうし。

「ああ、うん。ちょっと、友達待ってるんだ」

「こんなところで？」

「うーん……」

間違っちゃいないけど、明らかに変な理由だ。

「伏垣くん関係？」

間違いなくばれてる。して、どうやって逃れる？ というか、金重さんにならべつに話してもいいんじゃない？ いいよね、べつに？ でも、克磨の名前は伏せたほうがいいだろう。

「事故のこと聞いて、気になったんだ」

その答えに、金重さんは物悲しげに目を細めた。私は慌てた。

「そういうのって、やっぱり部外者に聞かれるの迷惑、だよな？」
取り繕うようにして私は言った。金重さんを見ていると罪悪感のようなものを感じてしまう。それほどまでに金重さんは辛そうだった。

「あ、いや、そんな、って言うのも変かな？ 露骨に拒否することできないし。でも、どうぞっていうのも、やっぱり変、だし」

伏し目がちに金重さんは言う。そんな姿がいつそう見ていて痛々しかった。

「ところで、金重さんはここへは何をしに？ やっぱり、伏垣くんの様子を見るに？」

克磨ばりに無理な話題転換をする。って、結局踏み込んで。

「そう、伏垣くんの様子を見て来いって大条くんに言われて。あ、でも、まだみたいだから、戻るね」

「待たないの？」

もしかしたらもうすぐ終わるかもしれない。

「いや、いいの。また来るから」

軽く手を振って、金重さんは去っていた。去り際の表情も、やはり辛そうだった。

金重さんが去ってからしばらくして克磨がやってきた。

「まだか？」

ぶつきらばうに克磨は聞いてきた。もっと他に、あるんじゃないのかな！

「まだみたいだよ。それから、さっき金重さんと会ったよ」

「金重さんと？」

「うん。伏垣くんの様子を見につて。でも、まだだからつてすぐ帰ったけど」

「それだけ？」

克磨は険しい目付きを鋭くした。えっ、なんで？

「どうしたの？」

「オマエ、ボクが嗅ぎ回つてるつて言つてないだろうな？」

脅迫するような目で睨まれ、私はこくこくと頷いていた。情けない話、克磨の迫力に負けた。

「なら、いいや」

克磨の目にひそむ剣呑の度数が薄れていった。

「それで、ゴミ捨て場で何か見付かった？」

一安心してそう尋ねた。そもそもここで私が待たされていたのはそれが理由だ。何も収獲なしとか言ったら、どうしてくれようか。

「見付かったよ。だいぶ重要な代物が」

にべもなくという表現が場違いなまでにぴったりなほど素っ気なく、克磨は言った。

「えっ、あつたの？」

「あっちゃ悪かったか？」

克磨は語感的に『惘然とした』と言いたくなるような顔をした。

「何があつた？」

克磨はかけていたカバンの中からそれを取り出そうとした。だが、ちょうどそのとき指導室のドアが開いた。

七

「うん？ 何やってるんだ、おまえたち？」

顧問の先生が立っていた。克磨はカバンから手を離し、「伏垣くんに用があるんです」と答えた。それを聞いた先生は顔をしかめた。「伏垣になんの用だ？ 君はさっき下にいたな？ 大条が何か言ってたが」

「ああ、気にしないでください。伏垣くんとは友達として話があるんで」

克磨のやつ、伏垣くんとも知り合いだったのか。

先生は納得してくれたらしく、背後にいる伏垣くんは何やら重そうな話を軽くしたあと、教頭先生とともに去っていった。

「で、君、誰？」

と言ったのは伏垣くんだった。あれ？ 今のは克磨に向かって言った言葉だよな？

「知り合いなんじゃないの？」

「いや。初めて会った」

「オイッ！」

私たちのやりとりを、伏垣くんは不思議そうに見ていた。

「あ、久し振り、伏垣くん」

ひとまず克磨への言及は避けて挨拶をした。

「久し振り、晩家さん」

さすがに笑顔は影を潜めていた。金重さんと同じぐらい活力がない。

「ちょっと話と違って、聞いてもいい？」

克磨ではややこしくなりそうだと判断し、私が話を聞くことにした。まるで私のほうが野次馬っぽくって嫌だなあ。

「あんまり、話したくはないんだけど」

そりゃあ、そうだよな。なんて思っているあいだに克磨は質問し

ていた。

「キミは、池幡さんの頭を殴ったんだよね？」

いきなりそんなことを克磨は質問した。ボールをぶつけたと言わずに殴ったと言ったところに克磨の意図が垣間見えた。

「えっ？ それはしてないけど」

私が指摘する前に自然と驚いた伏垣くんはそう答えた。

「そうか。頭にボールをぶつけたんだっけ？」

してやっつたりの表情で克磨は言いなおした。

「なんで、そんなことになったんだい？」

核心的な質問に、その場の空気が冷えた。しかし、「どう説明したらいいかな」と、話してくれる気配を見せた。

「話してくれていいの？」

私が驚いて聞いた。話してくれないと思っていたからだ。誰だつて、自分の過ちで人に怪我をさせてしまったことを見ず知らずの人間に話すなんて苦痛だ。

「あそこで練習していた経緯とかは大条から聞いてるよ」

克磨がそんな伏垣くんの立場なんて無視して言う。そんな態度を怒ろうとするが、伏垣くんは気にした素振りは見せずに話を続けた。「そっか。じゃあ、池幡さんが僕の練習を見に来てくれてたのも知ってるのかな？」

私と克磨は首を縦に振った。

「池幡さんは僕の様子を見に来てくれたし、バッターボックスに立ってくれたりもしたんだ」

「池幡さんが打つの？」

素直に驚いた。野球部マネージャーともなると、バッティングもできるのか！

「いや、池幡さんは実戦を意識してつてバットを持ってきてたけど、ネットをキャッチャーに見立てて打席に立っていただけだよ。それでも、いい練習になるんだよ。池幡さんは右打ちなんだけど、時々左打席にも入ってくれたりして」

やっと笑顔を見せて伏垣くんは言った。

「けど、暴投してしまったんだ」

途端に笑顔は引いていった。

「それを池幡さんはよけれなかった。それだけじゃなく、僕が放りっぱなしにしていたボールが池幡さんの足元には転がっていて、それに足をとられて彼女は転んだんだ。そのとき、思い切り頭を地面にぶつけてしまったんだ」

彼の脳内でそのときの映像が流れたのだろうか。伏垣くんは肩を落としてうなだれた。だがすぐに、顔をあげた。その顔は固かった。

「そのとき、池幡さんはどっちの打席に立っていたんだい？」

「右だけど」

「わかった。それから？」

「すぐに大条に言いに行った。ここで練習してるって教えてるのは、池幡さんと金重さん、それから大条だけだったから。理解してもらうには手早いと思ってね」

「すぐって、具体的に言うത്？」

「二分もかかってないと思う」

そこで克磨は思案気に顔をしかめた。それを見て伏垣くんがどうしたのだろうという表情浮かべた。克磨の表情から、私は話が終わったことを察した。

「ありがとう、伏垣くん。ゴメンね辛いこと聞いて。池幡さん、早くよくなるといいね」

「あ、うん。池幡さん、重態は避けられたようだから……いや、僕がこんなことを言うのはおかしいな」

暗い表情で伏垣くんは言う。私としては克磨の考えがあるだけに、そんな彼に遣る瀬無さを覚えていた。

「大丈夫だよ。それに、伏垣くんばかり責任を感じる必要はないんだから」

それを聞いて伏垣くんは一瞬きよとした。それからすぐに弱々しく笑んだ。

「うん。ありがとう」

私も笑い返した。

「そういえば、金重さんが、というか大条が気にかけてたよ」

克磨が難しい顔を解いて言った。

「そう？ 教えてくれてありがとう。たぶん部室かな？ いってみるよ」

「ああ。んじゃ、悪かったね」

克磨は片手を挙げた。

「いや、いいんだ。それじゃあ、えーと……」

「武登だ」

「それじゃあね、武登くん。晩家さんも」

伏垣くんはもう一度無理に作ってはいるが笑顔を向けると、私たちの前から去っていった。伏垣くんの姿が見えなくなってから、克磨がつぶやいた。

「これで、すべてわかった」

八

「これから野球部の部室へいく。で、帰る」

克磨かつまはそう告げると歩き出した。

「ちよつと待つて！ 部室いくつて？ 帰るつて何！」

「言つたままだ。部室いつて、用がすんだらボクはすぐに帰る」

「じゃあ、カバン取ってくるから待て！」

克磨は面倒そうに「ああん？」と唸ると、「じゃあ、さつさと取つて来いよ」と投げやりな感じで言う。

「走れ」

「なんで！」

「野球部のヤツが帰っちまうかもしれないだろう」

「わーん！」

私は階段を上へ駆け上がった。そして三階まで上がって疲れた。

「さつさとしろよ」

階下から克磨の声がする。言い返す気力をもう一度走る気力へかえた。

ホップ・ステップ・深呼吸のリズムで三階と四階のあいだにある踊り場に着いた。深呼吸をするため、一度膝に手をつけて身を屈めた。もしかしたら、私はちよつと楽しんでいるのかもしれないな、と思った。

よし、と手すりにつかまりながら前を向くと、折り返す段のから腕が伸びてきた。

「あつ」

と呟くあいだに、私は右肩を衝突されたような力で押されていた。あまりにも不意であつたため、後ろ向きのまま私は空中へと身を投げ出された。

悲鳴がしようない音量ででた。次の瞬間、私は背中と後頭部に衝撃を受けた。と思つたらそのまま階段を転がり落ちていた。頭を

両手で抱えながら転げ落ちた。膝をぶつけ、頭を守る手を切り、背中から三階の踊り場に着落した。

落下が終わった途端、はち切れそうな痛みが手の甲やわき腹、腿や足首を中心に噴き出した。視界もなんだかぼやけている。ぼやけた天井がモザイク加工されて見えていて、気持ち悪い。

定まらない視界で上の踊り場を見上げた。誰もいない、ように見える。

ふざけやがって――

天の声まで聞こえてくる？

だるくて口が開かない。あれ？　なんて言おうとしたんだっけ？　なんで、話そうとしたんだ？

足音が、廊下に反響した。……誰の？

「晩家さん？　どうした！？」
くれにけ

だんだんだんと階段を駆け上がってくる音がして――

「……………」

「……………」

人の声がする。それに気付いて目を開けると、ちよつと薄暗い天井が目に入った。

体を動かしてみると、節々から痛みの信号が伝わってきてほとんどりうつた。

がしゃんとカーテンが勢いよく開けられるような音がして、私の視界は明るくなった。蛍光灯の灯りが差し込んだらしい。

光のほうへ顔を向けると、克磨の顔が見えた。左手に白いカーテンを掴んで、無表情を浮かべている。いつも通りの顔だ。

「ああ、目、覚めた？」

克磨の隣に女性が現れた。確か、この人は保健室の先生だった気がする。若くて始終ぽけーとしている印象がある。なんでそんな人がこんなところに？　というかこんなところって何？　ここはどこ？　私は晩家弥芳。みよし　よし、オッケー。

「晩家さん、大丈夫？ 痛いところある？」

保健室の先生が聞く。私は「全身」と曖昧に答えた。

「三階で倒れてたみたいじゃない。武登^{むと}くんが保健室まで運んでくれたんだよ？ なんてまた、あんなところに？」

そっか。ここは保健室なのか。納得。って、克磨が運んでくれたのか。お礼言わなきゃな。というか、なんで私は三階で倒れたの？ 三階？ うーん？ たしか――

「あつ、そうだ、落とされたんだ」

「落とされた！」

突然の大声に克磨を見ると、なんとも形容しがたいという形容がしつくりくる表情を浮かべていた。

「誰に？ 誰に落とされたんだ！」

「冗語が恐がつて逃げていくほどの勢いがあったため、「わからない」と視線を天井へ向けて答えた。」

九

階段から落ちたことは確かなのだが、果たして、どうしてそんなことになったのだろうか？ いや、だから、落とされたんだって。でも、なんで？

「見てないのか？」

なにを？ そう聞こうとした自分がいて、すぐに私のことを落とした犯人を見てないのかという意味だと理解した。

「よく見えなかった。突然肩を押されたことしか、覚えてない。それと、うん、いやあ、悟りを開いたみたい。ふざけやがってっという天の声が聞こえた。あと、足音……なにそれ？」

言いながら、自分の身に起こったことと満身創痍の中で聞いた声と音に、正体不明な居心地の悪さを感じた。……思わず目をすこし細めた。唇が痛い。知らず織らずのうちに、口を真一文字に結んでいた。

やはり、ちょっと混乱していた。すこし、冷静になる必要があるみたいだ。

私は、三階と四階のあいだにある踊り場から、誰かによって落とされたんだ。

克磨がベッドに二歩近付いた。顔を向けると、やはり形容しがたい表情を浮かべていた。あれ？ 私、泣きそう？

「それは、脅しに近い罵倒だったんじゃないか？」

「うーん。そういうことになるかな？」

「なるかなって、オマエ、客観的すぎるんだよ！ バカッ！」

「バカッてなんだよ」
答える声に力が入らなかった。溜息みたいな答え方をしてしまった。

「バカだからバカなんだ！ 他人に心配かけてんじゃないよ！ かけられたら心配するだろ！ なんで突き落とされてんだよ！ なん

で突き落としたやつ見てねーんだよ！　アホか！　むしろ死んどけ！　生きてボクの前に姿見せんな！　死んで詫びる！　八地獄巡って来い！」

何言つてんだかまるで解せない。なにくそつて思いながら、目に搾り取られるような痛みを覚えた。

「そんなんだからオマ——」

なお続きかけた克磨の言葉は、保健室の先生の一撃において遮断された。同時に、目の痛みはなくなった。

なんと、あの始終ぼけーな先生が克磨の頭をゲンコツで殴ったのだ。

——バイオレンス。

「って、なんでボク、殴られたんですか？」

恨めしげに克磨は先生を見た。先生はスマイルを浮かべ、「保健室では静かにしてね。それに、傷付いてる女の子に対してバカとか死ねはないと思うな。冷静に冷静に」と諭した。

「確かに、言い過ぎました。悪かった」

克磨はしおらしく私に謝った。仁王立ちのまま。

ぽかんと、こぎみいい音がする。

克磨は頭を摩りながら私に頭を下げた。隣で先生がゲンコツを摩りながらにこやんでいた。

——……バイオレンス。

体中の痛みはひかなかったが、歩けないというほどではなかった。私は半身だけを起こした。目の前の克磨にとりあえず頬笑んでみた。克磨は「バカ」と呟き、はっとなって頭を手でかばった。先生がやれやれと溜息をついた。

私のカバンがなぜか保健室にあった。聞いてみると、克磨が取ってきてくれたらしい。

痛みはまだあるものの、こればかりは保健室にいても仕方がないため、家へ帰ることにした。入口のところで、先生は克磨に笑いか

けた。

「気をつけてね、武登くん。男の子らしくちゃんと晩家さんを守ってあげなさいね」

「よくそんな恥ずかしい言葉を口にできますね、先生。いやはやお若い」

ぽかん。

私と克磨は保健室をあとにした。

「あうー。あの先生、あんなに暴力的だったっけ？ あうー」

情けない声をあげながら、克磨はゲンコツされた頭を摩った。思わず苦笑がでてしまう。あそこまでぽかぽか殴られるなんて、私以外にはされたことがないのだろう。普通ないか。

「それで、どうだったの？」

下駄箱へ向かいながら私が聞くと、克磨はぶすつとした。

「何が？」

「何がじゃない」

「うん？ ああ、その前にだ。ゴミ捨て場に捨てられてたゴミ袋の中にさ、血のついた雑巾を見付けた」

克磨はバツクを漁りはじめ、使い古された雑巾を取り出した。私の目の前ではつとそれを広げてみた。一部、やけに黒ずんでいる箇所があつた。おそらく血だ。

「これは、野球部のゴミ袋の中にあつた。同じゴミ袋の中から野球関連の諸々が出てきたから間違いない」

野球部のゴミ袋の中から？ それは、つまり……。

「ねえ、それって……」

克磨は頷いた。まだ何も言っていないが、きっと私と克磨の考えは同じはずだ。

「野球部内に犯人がいる」

陽のだいぶ傾いた外へ出ると、克磨は携帯電話を取り出して誰かに電話をかけた。相手が出ると、相手の居場所を聞いた。それを聞くと、克磨はこれからそこへ向かうと言った。

「じゃあ、いこうか」

電話を切ると、克磨が堅忍するような顔をして私に告げた。私は「うん」と答えた。

そうして、私たちはグラウンドを目指した。

夕闇迫るグラウンドに人気なんてものは皆無だった。だが運動部の部室棟の前に三人の人影があった。

それを認めると、克磨は軽く息をついてグラウンドを横断しはじめた。私は克磨の数歩後ろについて歩いた。

「やあやあ、御三方」

間もなくして部室棟へ辿り着き、いつもの人をくったような口調で、克磨が声をかけた。私は克磨のすこし後ろに立った。

克磨は大条くん伏垣くん、それから金重かなしげさんを見渡した。

忌々しげに大条くんは克磨を睨んだ。眼光は鋭いが、不安定な様がポケットから出し入れする手の動きに見られた。ちなみに、大条くんは私のことを一瞥すらしない。

「そう睨むなよ」

飄々と克磨は彼をかわす。

「晩家さん、何しにきたんだい？」

伏垣くんが遠巻きに見ている私にそつと聞いた。「ちょっとね」と、模糊に返した。伏垣くんは仔犬みたいに無害な顔で首をかしげた。

「で、なんの用だ？」

大条くんが語気を荒めて聞いた。克磨はズボンのポケットに両手

を突っ込むと、楽しむような目で戴条くと金重さんを見た。

「大条さ、オマエ、とんでもないこと知ってるんだろう？」

「……なんだよ、いきなり？」

あからさまに大条くんは返答に窮した。

「オマエ、金重さんの秘密——ひいては野球部の秘密を握ってるんだろう？」

大条くと金重さんは気色を異にした。隣で伏垣くんは不安げな顔をしていた。

「どんな質問だよ、おい？ 脈絡ねーだろ」

「脈絡なんて気にしてどうする？ 逃げの一手にしては冴えないな。肝胆を砕けよ。だからボクみたいなのにすぐ不審がられるんだ」

克磨はそこで話す相手を金重さんへとかえた。大条くん以上に鋭い眼光を金重さんへと向けた。金重さんはそれを正面から泰然と受けた。とても同じ年とは思えないほどその態度は凛々しいものだった。私なんかは、怯んでしまう。

「何？」

物々しい声で、されど女性の品格的なものは持ち合わせた声で克磨を威圧した。

「お綺麗ですね、金重さん」

緊張の糸があっさり切れた。ぶちんつ、と。

何言イ出シテンダ、コノ子ハ！ いや、確かに金重さんは綺麗な人だけど……じゃなくて、違うでしょ！

言われた金重さんはそれまで顔に貼りついていた強面を崩していた。というか、鉄球でもくらった鳩みたいな顔をしていた。

うひゃー、吃驚！ みたいな。あっ、愛嬌ある。

「な、何を急に！？」

大条くんが空前絶後という呈で詰め寄った。

「あん？ 素直な感想を述べただけだけど、何か？」

対して無表情の克磨。
して。

なっくるッ！

私はかなり強めの左ストレート（捻り有り）を克磨の背中に叩き込んだ。「うぎゃー！」と喚いて克磨は前に飛び退き、背中を押さえて跳ねた。

「いつてーな！ 畜生！」

「話を脇に逸らしてどうする！」

克磨は飛び跳ねながら、「うるさいな。黙つとけよオマエは」と泣きそうな声を出す。

「仕方ないじゃん。こんな綺麗な人に、正面から熱い視線を受けたことないんだから」

なっくるッ！ 二発目は横へとびのいてよけられた。

「わかった、わかったって！ 話を戻せばいいんだろっ！」

自覚はあったらしい。克磨は背中を摩りながら部室棟の段差に腰かけた。私たちは克磨を半分囲むようにして次の言葉を待った。

「金重さん。アナタは気を失ってる池幡さんをバットで殴りましたね」

おーいてて、なんて最後にもらしつつ克磨は言った。あまりにも、あっさりと。

伏垣くんだけが、「どういうこと？」と合点のいかぬ声を出した。そんな伏垣くんは克磨は視線を合わせ、「そういうこと」とだけ答えた。いや、答えになつてないって。

「答えになつてないよ、武登くん。というか、どうしてここで金重さんが出てくるんだい？ 金重さんは関係ないじゃないか」

伏垣くんがちよつと怒気を含ませた目で克磨を見た。それを受けて、克磨はうつすら笑みを浮かべた。

「これから説明するよ。」

で、池幡さんが出血していたのはそれが原因。あそこには彼女の頭部以外で血は散つてなかったけど、それはアナタが道具の手入れのときに使つてた雑巾——えーつと、これでバットについた血を拭つたからですよね？」

克磨はバツクの中からさつき私に見せた雑巾を取り出し、金重さんに示した。

「何を根拠に？」

なんとか強面を作ろうとしながら金重さんは問うた。

「それはね、まず、帽子をかぶっている人の頭は、ボールがあたつたぐらいじゃあそこまで出血はしないと思つたからですよ。そう思つたらさ、彼女はきつとボール以外の何かもつと威力のあるもので殴られたんだつて考えるのが普通じゃないですか？」

男子と私に向けるのとは違つて丁寧な口調で克磨は説明する。

「次に気になつたのは、それじゃあ、血が付着した何かをどう処理したのかつてこと。ほら、あそこつてもものを隠すような場所なんてないじゃないですか。だから、きつと犯人は血を拭いたんだつて思つたんですよ。じゃあ、何で？ 着ていた服とか？ まさかね。あの場にいた人で体に血をつけていたのは池幡さんしかいなかった。となると、ハンカチなりなんなりで拭いたことになる。それで、こ

の雑巾なんですよ。ほら、血がついてるでしょ？」

克磨は手に持った雑巾で特に黒ずんでいる個所を示す。

「道具の手入れをしていたというなら、雑巾を使っているもおかしくない。これは、金重さんが使っていたんでしょ？ 野球部員の中で、今日雑巾を使っていたのはマネージャーさん方だけ。そして、伏垣くんがそこで練習していることを知っていたマネージャーさんは、池幡さんとアナタだけだ。それに雑巾なら、ジャージのポケットに隠しても見付かりにくい。まして、血がついている部分さえ隠せば、手に持っていたとしても違和感がない」

「そんなの、べつに池幡さんの血だかどうかなんてわからないじゃない。それに、今日ついたものじゃないかもしれないじゃない」

金重さんは反論する。鬼気迫るものがあつた。だが、克磨はやりとやり過ごす。

「これ、野球部のゴミ袋の中から見付けたんですよ。その中には他に、縫い目が解けたボールとか、ひびが入って使えなくなったメガホンとかがたくさん入ってたんですよ。それにそのゴミ袋自体、比較的新しいものでしたよ。今日整理をしていて出たゴミばかり、みたいないな」

さて、次は何を言うてくる？ そう言いたげな顔を克磨は金重さんに向けた。

「……でたらめよ」

金重さんは呪詛のように呟いた。

「そんなのでたらめよ。武登くんは考えすぎなのよ。普通に考えればいいことじゃない。実際にボールで池幡さんは出血したかもしれないじゃない。なんで私だと思うの？」

矢継ぎ早に金重さんは問い詰めた。その口調は落ち着いていて、核心をつかれた人の態度とは思えなかった。だから、私は少々不安になった。

だが、克磨は克磨だった。

「仮にボールで出血が起こったとしても、傷口の反対側から出血す

るようなことは物理的に不可能ですよ。池幡さんはあるとき右打席に立っていたようですから、ボールがあたって血が出るとしても、それは左側頭部でしょ？　けど、実際には右側頭部から出血していた」

金重さんはついに押し黙り、今度は大条くんの方が問うた。

「でも、俺は伏垣から教えてもらってからすぐに池幡んとこまでいつてるんだぜ？　それから一回も離れてない。それに俺自身言っただろ？　俺のあとに金重が来たって。池幡をバットで殴ってついた血を拭ってる時間なんて、あるわけないだろう！」

「そんなの、簡単さ」

大条くんの話を、一太刀で克磨はぶった切った。

「こんな事件、バレたら部として困るからさ」

不祥事を起こした高校が、公式大会の出場停止をくらうという話は、マンガやニュースでよく耳にする話題だ。

「大条は金重さんが池幡さんをバットで殴るところを目撃したか、そのすぐあとにやってきたんだ。それで、思ったんじゃないか？これがバレたら、大会に出れなくなるって。だから、隠した」

克磨の声が止まり、その場に静寂が訪れた。大条くんと金重さんは目を合わせると、互いに俯いてしまった。かといって私が何か口に出せるはずもない。

「ちょ、ちよつと待つて！？ ね、ねえ、いったいこれはなんなんだ？ 本当なの？ どういうこと？ わけがわからないんだけど？ 大条くんも金重さんも、そんなことないだろう？」

沈んだ空気に響いたのは伏垣くんの声だった。だが、問われた大条くんと金重さんは何も答えない。

再度沈黙があり、伏垣くんも口を噤んだ。一所に落ち着かない目が私に注がれ、そこで落ち着いた。私はなんと言っているのかかわからなかった。

ひとしきり克磨は私たちを見回し、「じゃあ、続けていいかな」と空気を讀んだ。克磨の声が場をふたたび混沌へいざなった。

「バットは、池幡さんが持ってきたんだ。伏垣くんの投球練習に付き合っただけにね。これは、伏垣くんが証言してる。そして、血を拭いたバットは、あの場所にちゃんとあった。大条が、担いでいたんだ」

私はきらきらと太陽光を反射していたバットを思い出した。

すでに話す気力をなくしているように思われる大条くんと金重さんは、克磨の言葉を呆然と聞いていた。伏垣くんだけが視線を忙しなく移しており、話から取り残されている感があった。

彼の戸惑いはわかる。仲間に大怪我をさせてしまったと思ってい

たら、真に悪いのは君じゃないと言われているのだ。それも真に悪いと糾弾されているのが仲間なのだ。

「それじゃあ、詰めだ。伏垣くんの暴投で頭にボールを受けてしまった池幡さんは転倒する。転がっていたボールで足をとられたんだよね、伏垣くん？」

伏垣くんに同意をも求め、伏垣くんはそれに首肯を返した。

「倒れた池幡さんは気を失い、伏垣くんは助けを呼びに行く。それと入れ違いに、金重さんは校舎裏へ来た。違います？」

目を金重さんに向けた。金重さんは弱々しく頷いた。

「マネージャーの仕事に戻ってもらうために呼びにいったのよ。校舎裏への道のそばで伏垣くんが部室棟へ向かうところ見たけど、伏垣くんは気付かなかった。校舎裏へいつてみたら、池幡さんが倒れていて、近くにはバットが転がっていて、そう。私はそれで、池幡さんの頭を殴った」

淡々と金重さんは言った。

「今回の事件はそもそも偶発的な事故ではじまった。ということは事件の計画性はない。継ぎ接ぎ感がありありだ。アナタは通り魔的に、池幡さんを殴ってしまっただけですね。その理由はなんですか？」

詰問口調で克磨は金重さんに問うた。目には憤怒の色が見えた。

これまで隠してきた怒りが、隠し切れずに溢れ出ていた。それに気圧された感もあったのだろう。金重さんが静かに口を開いた。

「野球部の中で、池幡さんの存在が強すぎて、存在感だけで言えば私なんかはいてもいなくてもよかったの。だけど、仕事の上では池幡さんだけじゃ勿論無理。でも、いつも見られているのは彼女だけ。私なんかはいくら頑張ってもチームメイトからお礼なんてそんな言わない。みんな、池幡さんばかりが働いているように見えた。それなのに、最近は伏垣くんの練習ばかり見てマナージャーの仕事なんかしてなかった。それなのにチームメイトはおまえだって三年なんだから、池幡さんぐらいに気を使えよって言う……私だって、頑張ってるんだ！」

だんだん、堪え切れないというように叫んでいた。

「結局のところ、嫉妬みたいなものなのかもしれないけれど」

うつてかわって自嘲気味に金重さんは言う。心底、自分に呆れているように。それを聞いて、克磨は真逆な感情が入り混じったような表情を浮かべた。

「まあ、変に言い訳するよりも潔いですけどね。でも、あんなことをした必要性も必然性もありませんよね？ それ、ちゃんとわかってくださいね」

と、克磨は私の方へ向かってきた。

「ほら、駅まで送ってやるから、早く帰るぞ」

「へっ？」

終わり？ あれで終わり？

「あ、あのさ！ 克磨」

「なんだよ？」

大儀そうに問い返す。克磨がそんな態度だと、本当にこれで全部
終わりみたいな気分になるじゃないか。

「これで、終わり？」

「何がだよ？ あとは野球部の問題だろう。それに、池幡さんだつ
て重態じゃなさそうだから死にはしないさ」

首を振って克磨は私にそれ以上話をさせなかった。

振り返り、大条さんと金重さんに向き直った。二人ともうなだれ
ていた。伏垣くんが一人、状況を受け入れられていない様子だった。
やはり、伏垣くんは優しい人なのだなと感じた。露骨な話、池幡さ
んが重傷を負ったのは彼のせいではなく彼女のせいだとわかり、普
通なら安心するところだ。だけど、彼は安心しない。というか、で
きない。彼には、できないんだ。

「騒がしたね、大条。それじゃあ、また。金重さんも伏垣くんもね」
片手を振って克磨は歩きはじめた。私は三人に頭を下げてからあ
とを追った。

「ねえ、克磨——」

私を無視して、克磨はどんどん進んでいった。駆け足にならない
と追いつけそうになかったが、まだ体が痛くて走れなかった。すぐ
に克磨は校舎の陰に入って見えなくなった。

克磨は校門で待っていた。克磨は自転車通学のため、そばには自
転車が停められていた。

「遅い」

「うるさい。こっちは体が痛くて仕方ないんだから」

そう不平を言うと、克磨は減らない口を閉じた。

「やべ」

唐突に克磨は呟いた。

「どうした？」

「教室に忘れ物。オマエ、先歩いてろ。すぐに追いつくから」

と言うと、克磨は自転車を転がしながら校舎の方へ向かっていった。

「先って？」

そりゃないぜ、克磨さん。時々でもいいから、克磨は私のことをもうすこし女の子を相手にするみたいに接してもいいと思うんだが。まあ、言っても仕方のないことなんだけど。

「でも——」

今の忘れ物は嘘だろう、おい。

して。私はこっそり克磨のあとを追うことにした。

一四

克磨が向かったのはやはり教室ではなかった。グラウンドだった。
——どうして、また？

私は校舎の影に隠れながら克磨の行方を追った。克磨は部室棟へ一直線に向かっていた。三人の姿はもうなかったが、おそらく部室内にいるのだろう。部室棟へ辿り着いた克磨は、棟の前に自転車を置くと部室の一つへ入っていった。

やはり、まだ終わりではなかったのか。でも、なんで私は外されただんだ？

痛む背中や腕を摩りながら首を傾げてみるが、それで答えが出るわけもなかった。

「やつぱり、除け者ってことかな？」

考えないようにしていたことがすぐに口をついて出た。

しかたない。盗み聞きをしよう。

そう決めて、私は部室棟へ向かった。克磨が入った部屋のそばまで近付くと、部室から伏垣くんが出てきた。

「って、なんで僕が追い出されるわけ？ あれ？ く——」

私は唇に人差し指をあてて伏垣くんを制した。伏垣くんは後ろを一瞬見てから、私のそばへ駆け寄ってきた。

「で、どうしたの？」

「克磨のあとを追ってきたんだ。克磨、教室に忘れ物したとか言って、私を除け者にするんだ。だから、盗み聞きをするの」

伏垣くんは苦笑いを浮かべてなるほどと頷いた。

「伏垣くんはどうしたの？」

理由はおそらくわかるが、とりあえず聞いてみた。伏垣くんは肩をすくめた。

「武登くんに追い出されたよ。『キミはいるべきじゃない。いちゃいけないんだ。よって即刻帰りなさい。池幡さんへのお見舞いも忘

れずに。それじゃあ、バイバイ』って」

「ははあ」

克磨らしい強行手段だ。

「うん。じゃあ、帰るんだ」

「うん。帰りに池幡さんのお見舞いに行こうと思う。それじゃあね」
バイバイと手を振り、伏垣くんは私の横をとり過ぎた。私もバイバイと手を振った。

して。『野球部』と書かれた部室に近付き、私は耳を澄ました。
辺りは静かなため、まったく聞こえないということはないだろう。
「もう一度聞きますよ」

狙い通り、克磨の声が小さくなって聞こえた。

「どっちが突き落としたんだ、コラアツ！」

ライオンが咆哮したのかと思った。突然の克磨の怒鳴り声に、私は克磨が今なんと言ったのかわからなかった。

「大条、オマエかつ！ オマエが突き落としたのか！」

がしゃん、と何かが倒れる音がした。

「は、離せよ、武登！ あぶねーって！ ちよ、ちよっと落ち着け
！」

大条くんの声がした。

克磨が、大条くんに掴みかかったのか？ あの克磨が？

「それとも金重さんか！」

「ち、違う！ それは私じゃ——」

「どっちなんだよ！」

ばかんっ！ どかんっ！ って、なんの音、これ？ や、まずい
んじゃないのかな、これは？

「わ、わわわっ！ やめ、やめろ！」

大条くんが危機に直面したような声をあげた。

——ああ、まずい。

私はドアノブを掴み、思いっきり開いた。

「克磨！ 何やって——」

「うぎゃー！」

勢いよく開け放ったドアは、同じぐらい勢いよく跳ね返って閉じた。あと一歩前に出てたら鼻を打つところだった。

「あれ？」

約二秒の静寂のあと、私はゆっくりドアを開いた。おそろおそろ部室の中を覗くと、まず金重さんと目が合った。部室の隅に座り込んでいた。私のことを未確認飛行物体でも見るような目で見ていた。もうすこし開けると、倒れた机とその横に尻餅をついている大条くんがいた。さらに開けようとして、何かにつっかつた。入れないこともないので入ってみると、何がつかかっていたのかがわかった。体の背面に手を伸ばして、ひたすら痛がっている克磨だった。またたびを嗅いだネコみたいに床を転がっている。

「えーと、どうしよう？」

「どうしようじゃねー！　なんでオマエがつ！　って、いてー！」
背中を押さえながら克磨は床の上をごろごろ転がり回った。うわー、砂埃が立ってる。

ではなく。私は克磨をうつ伏せに押さえつけ、痛がる個所に手で触れた。

「うぎゃー！　殺す気か！」

「そんなわけないでしょう。金重さん、何か冷やせるものってないかな？」

隅っこで縮こまっている金重さんに問いかけると、彼女はよろよろした足取りで救急箱を持ってきてくれた。

「シップなら……」

そう言いながらシップを渡してくれた。それにお礼を言い、私は克磨のワイシャツをむんずと掴んで彼の背中をあらわした。

「って、何するんだ！　人の肌見てんじゃねー！　キャーキャー！」

克磨の背中的一点がやけに腫れていた。高さにドアノブの位置と同じぐらいだろうか？　私はシップのビニールを外し、そこへそっと張った。

「うつ、ぎゃあああああ！」
克磨がふたたび叫んだ。
うるさいな、もう。
でも――

「俺が、晩家さんを突き落とすとした。すまない……」

克磨がひとしきり騒いだあと、大条くんが呟いた。足元で克磨がギューと呻いた。

「発覚することが、怖かったんだ。克磨なら、気付くんじゃないかと思ったんだ」

「それじゃあ、どうしてボクじゃなくて晩家さんを襲ったんだ？」
ふぎゅーという風に克磨が足元で喚いた。

「それは――」

「まあ、効率的だからだろうな。逆効果だったけどね」

克磨が大条くんを制して言った。

「つて、失言。忘れる」

克磨は続けてそんなことを言った。他人を思いやる気持ちみたいなものを垣間見せてしまい、気恥ずかしいのだろう。それよりも、今は単純に私の方がのろまでどんくさそうだったから狙いやすいとでも言いたかったのかな、コノ子ハ？

一瞬部室内に沈黙が訪れた。呼ばれもしないのにやってきて居座るそいつを追い出すため、私は声を発した。

「じゃあ、克磨。帰ろうつか」

克磨を立たせ、体中についた埃を払う。ぽんぽんするたびに克磨は痛がった。こっちだって痛いんだから我慢しろ、と言うと大人しくなった。

「悪かった、ごめん」

もう一度大条くんが私に頭を下げた。それぐらいじゃ許せるはずはないが、もう、いいや。

「私に謝っただけで許されたなんて、思わないでね。池幡さんは重傷を負ってるんだから」

なんて言えばいいのかわからなくて、そんなことを言っておいた。

捨て台詞にしては貧弱だったかな？それに、言う相手を間違っている。いやあ、ヒロインにやなれねえなあ。

いいや。そんなことより、今は克磨と帰ることのほうが大切だ。部室を出て、ドアを閉めた。そばに自転車があるにやがて佇んでいた。

「押してけ」

私は左手で克磨、右手で克磨の自転車を支えて校門を目指した。途中からもう大丈夫だと私の支えを邪険に払い、自転車も自分で押すようになった。

よくわからないけど、頬笑ましかった。

「にしても、克磨があんなに他人のことで感情をあらわにするとこなんて、今まで見たことなかった」

帰り道で私が話題を振ると、克磨は背中を痛がりながら「情けないったらありやしない」とぶつくさ。

「情けないって？」

「なんでもない。オマエには関係ない」

つれないことを言う。左腕を挙げてみせると、過剰なほどの反応で頭を守った。

「何もしません」

と、黙り込んでしまった。こつこつアスファルトを踏みしめながら話題を探した。いつもなら沈黙は友人のふりして私たちのそばに居座るのだが、今は何か話していないと気まずかった。そんな気分になるのは、何かから目を逸らしているからのような気がした。ただ、それが何かわからない。

「そういえば、なんでオマエ部室へ来たんだよ？」

溜息を添えて克磨は言った。

「だってさ、克磨。教室に忘れ物とかって、嘘でしかないだろう？」
「しかたないだろう、嘘なんだから。そこら辺は察しろよ」

常識だろう、とても暗に意味するつもりなのか、冷めた目で見て

くる。どうせ、私は非常識な人間ですよ、克磨にとって。

「バカみたいじゃなか」

飛矢のごとく、その言葉が不意に耳に突き刺さった。

「えっ？」

「バカみたいじゃん。一人で乗り込んでいって邪魔されるとか。竜頭蛇尾も甚だしいって」

克磨は前方を物悲しげに見遣った。

「会話の中に四字熟語を入れる人、初めて見た」

克磨らしくない雰囲気になっているので、とんちんかなことを言って返した。

「オマエとかよく言っそうじゃん。赤点補習とか遅寝早起きとか。ありや、字余りした」

「ホー。二つとも現実射ってるじゃん。というかそれ、四字熟語じゃない！」

「ボクはさ」

無理矢理克磨は話題を切った。切って、沈黙した。

「ボクはなんだよ？」

「人が見てる前で頑張るとか、苦手なんだよ」

言葉を選ぶようにして言った。

「オマエの見てる前で、オマエのために頑張れるわけないじゃん。というか、誰かの前でその人のために頑張るとか、みつともないじゃなか」

また、わけのわからんことを。

「どうして？ 誰かのために目の前で頑張るのって、いいんじゃない？ どうして？」

「だってさ、露骨なまでに『オマエのために頑張ってるぞ、ボク』みたいな感じになるじゃん。それってすごい独りよがりじゃん」

「常に独りよがりの君が言っな」

でも、克磨はそういう人なんだ。

善行は陰で行えっという考えを、幼稚園児みたいな純粹さと高校

生らしい皮肉っぱさで貫こうとしてるんだ。

「ありがとう」

「はっ？ 急に何言ってたんだ？」

「私が階段から突き落とされたとき、保健室まで運んでくれてありがとう。私を突き落とした人を突き止めようとしてくれてありがとう。その人を怒ってくれてありがとう」

「気持ち悪い。しかも、そんなことオマエがお礼言う必要ないだろう？ 誰だって知り合いがそんな目に遭えば同じことをする」

克磨は私を一瞥した。声音には呆れが含まれていた。本当に些細でどうでもいいことだ、と思っっているみたいに。

「あたりまえなことにはお礼なんか必要ないって、お偉いさんかよ」
皮肉ってみるが、克磨はそんな馬耳東風。呆れながらも、諭すように私は続けた。

「お礼を言われることを、そんなに自分とは無縁なものって思わなくていいんじゃない？」

克磨は足を止めた。自転車のチェーンの回る音がやんだ。私も立ち止まり、ちよつと前後を見て通行の邪魔になってないか確認した。それから克磨へ向き直った。

「頑張ったことを頑張ったねって褒められていいんだよ。むしろ言わせる。言わせてくれないと、悪い気がするのほこちなんだから」
「うるさい」

克磨は言って、一人歩き出した。って、それ以外に何かないのか！
「克磨は卑屈すぎる」

他人に迷惑にならない程度に克磨を怒鳴った。克磨は「うるさい。アイデンティティを否定するな」と答えた。

——コノ子ハ、モウツ！

かつかつかつと近付いて、その背中になつくるツ！ を打ち込んでやろうとした。だが、拳は触れるか触れないかの位置で止めた。気がかわった。代わりに拳を開いて、そつと背中を撫でてみた。

気色悪そうに、克磨はグヘエと言った。

一五（後書き）

以上で『校舎裏のツギハギ感』は終わりです。最後までお読みいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6983x/>

校舎裏のツギハギ感

2011年11月29日13時08分発行